

# Small Story in Kamijima

かみじま発 スモールストーリー



生名島 (いきなじま)

人口 1763人 世帯数 888

## わしが せにゃあ〜!

お話をきかせてくれた人

立石観音保存会会長  
村上 正祐さん (66歳)

1945年宇部生まれ。生後すぐに両親の故郷である生名島に戻り、生名島で育つ。生名島の向かい側、広島県因島の日立造船に就職。18年間勤務の後、生名島で「生名マリン」を創立。船の修理などを行っている。町指定有形文化財である「メンヒル(三秀園)」の保全活動や、祭り実行委員会の活動に積極的に取り組んでいる。家族は、妻。ビールが好物。トレードマークは青いツナギ。

12月。寒空の下、神霊の宿る石神として弥生時代から信仰の対象であった高さ4mのメンヒル(巨石)しめ縄を綯う。(撮影:菊本昌克)

古来より、人の営みは「祈り」と共にあった。わたしたちの先祖は、自然からの恵みに感謝をし、時に自然の怒りを鎮めるために、祈りを捧げてきた。

生名島の北部に、立石山という山がある。古来より、神霊が宿る山として、瀬戸内海の航海の安全や、豊漁、豊作の祈願が行われてきた山だ。山頂では、祭祀遺跡(主に弥生時代のもの)が発見されており、そのふもとは、高さ4メートルの巨石が祀られている。神奈備の山、立石山の保存活動をしている方々の活動に同行させてもらいながら、お話を伺った。

※なお、本記事は特定の宗教を擁護・支援するものではありません。「文化的」「民俗的」な視点から、私の個人的な印象を述べるものです。



## たかが草刈り、 されど草刈り

—「立石観音保存会」の活動内容を教えて下さい。

観音さまのことは、おばちゃんらがやっとして、わしらがやっとは、環境の整備というサポート的なこと。

主な活動は、定期的な草刈りと、4月の第2日曜の観音さまの例大祭の準備と手伝い、年末のしめ縄張替え。どれも地道なもので、華々しいものじゃないんやけどね。



—活動を始めてどれくらいになりますか？  
始まりは……、何年か知らん。相当古い。わしらが仲間に入れさせてもらうてから、もう20年くらいになる。その前にも先輩がやっとしたから、もう随分になる。

—草刈りはどれくらいの頻度で行なっているのですか？

4月の本祭の前、6月、8月のお盆、10月、12月の5回くらいかな。そんだけやっても、今は、草がすぐ生えてくるから大変なんよ。わしらがこまい(小さい)

時には、三秀園(立石山ふもとの庭園)でよう遊んどったから、草も生えにくかったけど、今は踏むものがおらんけえ、生え放題よ。

この前なんかは、池の周りの生垣が、ものすごい大きゅうなってね。これじゃいかんちゆうて、切ることになったけど、前までそういう仕事をしてくれた人が亡くなってしもうて、わしら素人が仕方なくやったんよ。昔は、お堂からも、海が見えて見晴らしがよかったんやけど、今は大きな木が塞いでしまっていて。どうに

かせないかんと思っではいるんやけど、木を切るのはなかなか大変やから、手をつけられずにいる。草刈りの人手も足りていない。行政にも、手を入れて欲しいと思っても、三秀園は私有地ということなので、なかなか難しく、話が進まない。

—例大祭のときにはどのようなことをするんですか？

前日に、何本もののぼりを立てる。竹を切ってくるところから始まる。当日は、おばちゃんたちがお堂で、お接待(参拜



者に飲食物をふるまうこと)をするので、そのサポートをしている。

お接待でもらうモノそのものは大したことないんよ。かっぱえびせんの小袋とか、駄菓子のゼリーとか。買えば大したことない。でも、お接待で貰うのは、違うんやね。お堂まで登っていくと、おばちゃんたちが、「ご苦労さん、ご苦労さん。はい、お接待よ～」と言って、くれるんよ。1つが10円や20円のもので、そうやってもらえると、嬉しいもんなんだよね。

—秋祭りの実行委員長もされているんですよ？

ちょっと昔の話になるけど、今から30年ほど前、造船不況で「島が沈む」と言われた時代があってね。隣島の因島で造船業に従事する人が多かった生名島では、人口がどんどん減ってしもうた。

永く生名の祭りを支えてきた生名祭礼保存会が解散して、だんじりが出ん年もあった。その後、平成16年に町村合併。平成18年から3年間は、自治会がだんじり運行をやったんやけど、自治会の役員が交代したら、祭りには関わらんということになった。

祭りにだんじりが出んのでは、生名がさみしゅうになってしまう。この地域がすたれてしまう。なんとかせにやいかんと思うとときに、若い者から「正祐さん、だんじりをだしてくれ！」と声がかかった。

祭りについては、平成5年に商工会のだんじりを作ったことがきっかけで、太鼓をたたく子どもらの世話をしていたんよ。その子どもらが大人になって、だんじりを担ぐ歳になり、だんじりをだしてくれと言うんで、地元の有志で実行委員会を立ち上げてやるようになった。

そんでその時、わしらは残ったんやけど、それまで主力になってやとった70代の人らが辞めてしもうたんよ。それから、新しい人に入ってもらったりして、今の形になっている。

動く人がいなくなってしまうと、組織は潰れる。若い人を入れて、どんどん継いでいかなければならない。仲間として引っ張りこんでおく。「わし、保存会委員になっとなるのかえ？」という感じでもいい。ピラミッドのバランスを保たなければなら



## 誰かがしないと 終わってしまう

—立石観音保存会にせよ、秋祭りにせよ、村上さんが、そうやって地域の活動に取り組まれる理由は何なのですか？

なんじやろうね。「わしがせにやあ」って思うたんよ。ずっと昔から続いできたことは、誰かがつないできたんよね。今、自分の番が回ってきたのかもしれん。と思うてね。

ない。自分の身体が動くからといって、いつまでもトップにいるのはだめ。もちろん、引退しても色んなサポートはするけど。

でも、新しいメンバーを入れようとしても、信仰に結びついているような感じをもつのか、なかなか入ってきてくれない。入ってきても、しんどいことばかりだしね。のぼり立てるのも、しんどいんよ。竹を切って、立てて。それをまたしまつて。

—その「わしがせにや」って、思えることがすごいと思います。

自分でもバカだと思うわ。けど、ほんまに誰かがせにやあね。

—立石保存会のこれからは？

高齢化も進んで、何年か前に、もう全部やめるかっていう話にもなったんよ。でも、それじゃ困るやん。わしらもこまい時に、なんぼか楽しませてもらうたし、今は子どもが少ないというても、何十人かは楽しみにして来てくれる。その子どもらの夢を奪っちゃいかんと思つて。

まあ、わあわあ言いながらやるんやけえ、楽しみもあるんやけどね。休憩におばちゃんらがコーヒー淹れてくれたり、草刈りが終わったらイッパイ飲んだりね。これが、ハタチの娘が淹れてくれるコーヒーならもつといいけどねえ。ハタチの娘が「4人分」よ(笑)。



笑顔がチャーミングな正祐さん。



# 立石山 を歩く



立石山のふもとにある巨石(メンヒル)。横には、弁財天が祀られている。

**立**石山は、とても不思議な山だ。

山の形が美しい三角形をしていたことから、立石山は、神奈備(神のいる)の山として、古くから近隣の島々で暮らす人々の祈りの対象であったらしい。山頂には、石神(いしがみ)、磐座(いわくら)、磐境(いわさか)が見られ、特に弥生時代に盛んであった巨石信仰の祭祀場所であったことが分かっている。

ふもとは、高さ4メートルのメンヒルと呼ばれる巨石が祀られている。人々を圧倒するような巨石や巨木、山は、古代の人々の信仰の対象となった。メンヒルの前に立ち、心を鎮めると、そんな先人たちの気持ちが分かるような気がする。自分より「大きなもの」を偉大に思う謙虚さを彼らは持ちあわせていたのだろう。

不思議なことに、この巨石は、生名島のものではなく、ほかの島から運ばれてきたといわれている。どこから、どんな方法で運ばれてきたものかはわかっていない。

※石神・・・神として崇められた石。  
※磐座・・・神が天からおりてきて座る石。  
※磐境・・・神域の境に並べられた石。

※メンヒルは、地中部分が3メートルあり、かつては7メートルの巨石だった。



山頂の磐座。こんなに大きな石をどう運んだのか、本当に不思議だ。



**立**石山の中腹には、観音堂があり(現在は、ふもと近くに移転)、その横の岩窟には子安観音が祀られている。子安観音は、安産と子どもの無事の成長を守る菩薩であり、島の人びとは、子宝を授かるように祈り、授かると安産を祈って腹帯を頂き、生まれるとお乳がよく出るようにと、布で作った乳型をお供えしてきた。今も、保存会の方々が腹帯を作っており、祈祷を受けた腹帯を分けて頂くことができる。

話が少しずれてしまうが、立石観音を語るに外せない人物がいる。大正～昭和を生きた麻生イトという女性だ。夫と離婚し、子どもを連れて、当時造船業で好景気だった因島へ移り住み、旅館経営や現在でいう人材派遣を始めた女性経営者の先駆けだ。男社会で生き抜くために、髪を短く切り詰め、男装をしていたため、「男装の女傑(じょけつ)」と呼ばれている。イトは晩年を生名島で送っており、私財を投じて、三秀園や立石観音堂の整備を進めた。

※女傑・・・気性・言動などが思い切りがよく、大胆で、すぐれた働きをする女性。

こうして、古代から現代まで、立石山は、生名島の人々にとって大切な、祈りの場所として存在してきた。

子安観音。布で作った乳型がお供えされている。近年では参拝者も少なくなり、最後のお供えは10年以上前のもの。観音様の衣装も、保存会のおばちゃんたちが作っている。



人の営みは、祈りとともに。



## 立石山がつなぐ、人の輪。



村上さんがおっしゃるように、保存会の活動は、決して派手なものではない。草を刈り、のぼりを立てる。「裏方」の仕事だ。けれども、裏方がいないと舞台は成り立たない。そして、裏方の仕事は、地味にキツイ。

村上さんを中心とした男性陣は、草刈りやのぼり立てといった仕事を担当しているのに対し、女性陣は、関係者の食事の用意やお接待用のお菓子の準備、当日のお接待などを担当している。どちらも、高齢化が進み、山中での作業は年々困難になってきている。

山のふもとにある小さなお堂。ふもとと言っても、少し坂を登らなければならず、高齢の方にとっては、「しんどい」道のりだ。最高齢はもうすぐ80歳。この道を登るのは、さぞ大変なことだろうと思う。ゆっくりゆっくり登っても、息が切れる。それでも、「できることがある限り、やる」と言っている。そして、みんなでおしゃべりをして笑いながら、ご飯を作ったり、お接待のお菓子の準備をする。

例大祭の前日、準備の合間にみんなでお昼ごはんを食べた。初物の筍ごはん。「みんなで食べるから、美味しいね。うちは普段、1膳も食べんが、今日は美味しいから食べてしまったわい」と言って、ひとり暮らしのおばちゃんの食も進む。

いくつになっても女子は女子。おしゃべりが大好きだ。人に会って、話して、笑って、一緒にごはんを食べて。そういう場があるということが、とても大事なことなのだと思う。そして、それは男性も同じ。「しんどいのう」と言いながらも、身体を動かして、最後に一杯やる。小さなことだけれども、そこには達成感がある。

こうして、保存会の活動に同行していると、元々は信仰のために行われていたことが、今はその意味合いを変えてきているように思われた。不思議な謂れをもった立石山という山があることで、人が集まる場ができて、交流が生まれる。祈りというものは、自然や神との絆を深めるだけではなく、人と人の絆をも深める行為なのかもしれない。

今年の例大祭は、4月8日(日)に行われた。当日は多くの参拝客で賑わい、普段は静かな神の山が活気づいた1日となった。

※例大祭の他、毎月18日を観音様の日として、ふもとのお堂でお接待が行われている。





Girls,  
Have Fun!





地域のつながりって何だろう

立石山に限らず、祭りや伝統行事の担い手不足に苦勞している地域は多くあります。おそらく、上島町内のほとんどの地域が、そういう現状にあるのではないかと思います。本誌第二号で特集した高井神島では、祭りの囃子唄を唄える人はもういなくなっていました。残念ながら、一度消えてしまったものを取り戻すことはできません。

文化的な継承という側面だけではなく、私が大事なことだと思うのは、こうした伝統行事のなかにある、人と人とのつながりです。地域の人々が一緒に作業をする場があるということが、とても大切で必要なことだと思っております。

地域のつながりには、趣味や相性でつながった友達とは違って、中には好きではない人やウマが合わない人もいるでしょう。個人の「好き」を優遇してきた現代社会では、「わざわざ」合わない人とつながる必要はないと考える人も多いのではないかと思います。しかし、「そこに住んでいるから」という理由だけつながれるということは、実は

とても「強く」そして「優しい」ネットワークなのではないかと思うのです。

そこで生きている限り、果たすべき責任がある。村上さんが「わしが、やらにや〜」とおっしゃるのも、そういうことなのではないかと思うのです。

まあ、そうは言っても、人間というものは厄介で、好き嫌いが色々ありますからね。うまくいかないことももちろんあります(笑)。でも、おばちゃんやおっちゃんたちと一緒に作業をしていると、そこには笑いがあつて、優しさがあります。仕事をした後の達成感もあります。それは、私にとって新鮮なことです。

帰り際に、「これ、持って帰ってご飯にしないかい」と言つて、おむすびを持たせてくれたり、お菓子をくれるおばちゃんの優しさ。出来上がった百人分のちらし寿司を見て感じる達成感。

面倒なこと、しんどいこと、裏方の仕事かもしれないけれど、そこには優しさや達成感がある。まだまだ、私たちができることはあるなと感ずるのでした。

click  
本誌の  
コンセプト

『スモールストーリー』が読める場所

【紙で読む】弓削総合支所、弓削港、町民プラザ、せとうち交流館、弓削商船図書館・寮、弓削高校図書室、弓削中学校、しまでカフェ、やよみ亭、立石港、岩城支所、岩城中学校、よし正

【ネットで読む】上島町島おこし協力隊のブログ <http://setouchi-k.town.kamijima.ehime.jp/blog/sima/>

About ME



文と写真と編集

ふじまき みつか (まっきー)

1983年山梨県生まれ。A型。ふたご座。国際基督教大学教養学部国際関係学科専攻。山梨→東小金井→フィンランド→吉祥寺→上島町生名

部内マーケティング会社に勤務ののち、2011年10月より、愛媛県越智郡上島町(人口約7500人)の離島に移住。島おこし協力隊として活動中。

最近びっくりしたこと: 外でお弁当を食べていたら、トンビがアタックしてきて、お弁当箱がコロコロ転がっていったこと。家の前に、フグが落ちていたこと。旬のワカメがとても美味しかったこと。

click  
いいね!してください  
facebook

協力隊の日々をチェック  
blog



click

かみじまのことは

わや、わやにする

【意味】 めちゃくちゃ、使いものにならない

【用例】

机の上がわややけん、はよ片付け。

食べれんやんか。

(机の上がぐちゃぐちゃだから、早く片付けなさい。ごはん食べられないでしょ。)



How do you think?  
ご感想お聞かせください。

メール: [fujimaki-mitsuka@town.kamijima.ehime.jp](mailto:fujimaki-mitsuka@town.kamijima.ehime.jp)